平成２７年度　学力向上アプローチ事業　研究指定校のまとめ　　別紙様式

学校名 （生徒数）	栗東市立栗東中学校 （682人）

（本研究に係る問い合わせ先）
所　在　地　：滋賀県栗東市安養寺六丁目６番 15 号
電話番号　：０７７－５５２－４３５９

【研究の目的，研究内容】

（１）全国学力・学習状況調査の結果から見えた課題（研究当初）

①低い正答率と高い無回答率

国語では以前からＢ（活用）問題に多く課題がある。問題形式別にみると、「記述式」で解答する問題の正答率が低く、無回答率が高い状態が続いてきた。「記述式問題に何をどう書いてよいかわからない。考える前にあきらめてしまう。」という傾向が続いてきた。

しかし、一昨年度からの学力向上アプローチ事業による取組により、やや改善傾向がみられ、「考えよう、答えを書こう。」とする生徒が増えてきたといえる。

②「書くこと」の課題

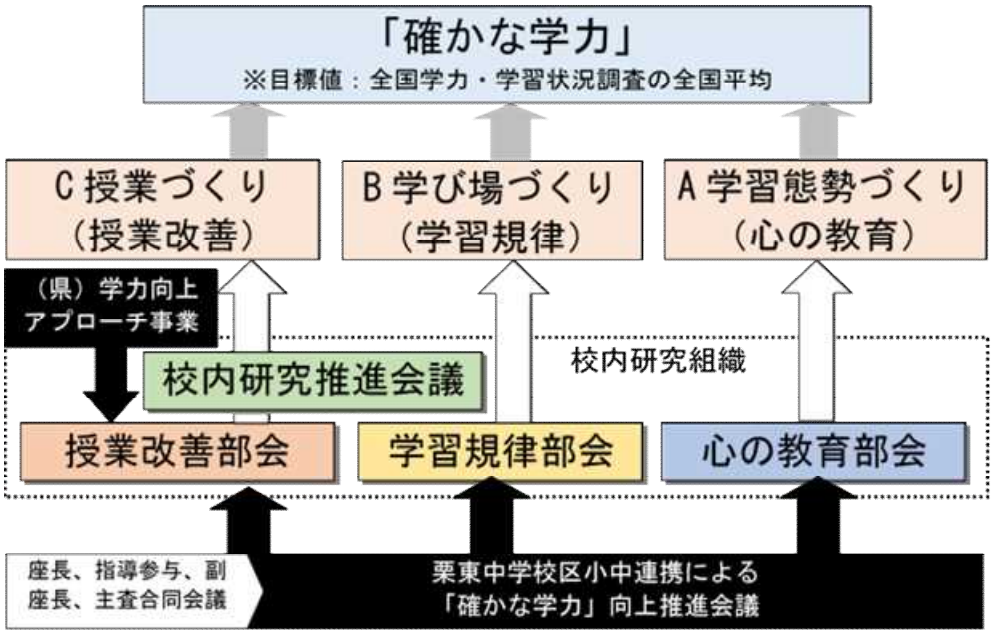
また、「書くこと」に関する問題に多くの課題が見られる。具体的には「根拠を明確にして自分の考えを書く」や「複数の資料から適切な情報を得て、自分の考えを具体的に書く」などの問題の正答率は非常に低い。とくに、複数の資料や条件、指示のある問題に対して、完全に答えることは難しく、指示の読み落とし、自分の考えが持てないなどの課題がある。

（２）課題解決に向けた改善策

ア）３つの側面からの多面的な取組

本校では学力向上を「全校で取り組む学力向上」をテーマとした校内研究に位置づけ、「Ａ学習態勢づくり（心の教育）」、「Ｂ学び場づくり（学習規律）」、「Ｃ授業づくり（授業改善）」という３つの側面からの多面的な取組を進めることで、学力向上を目指してきた。特に３年目となる本年度は、「Ｃ授業づくり（授業改善）」を重点として進めてきた。

＜研究構造概念図・イメージ＞



イ）栗東中学校区『確かな学力』向上推進会議の１０の共通実践

その中で、「Ａ学習態勢づくり（心の教育）」と「Ｂ学び場づくり（学習規律）」については、９年間を見据えた学力向上をめざし本校が校区内３小学校と共に推進してきた「栗東中学校区小中連携による『確かな学力』向上推進会議」の取組とリンクさせ、次の「１０の共通実践」を中心に推進してきた。

＜栗東中学校区小中連携による『確かな学力』向上推進会議の１０の共通実践＞

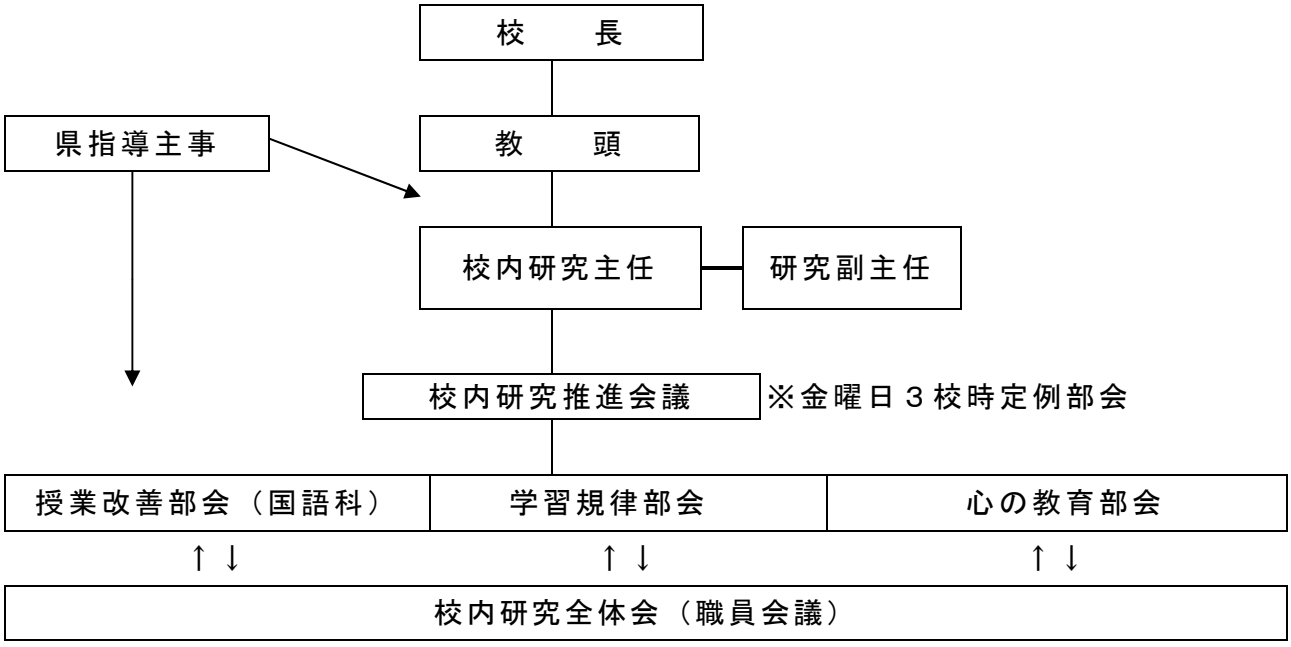
①授業のけじめ（はじめと終わりの号令「起立」「礼」「着席」の徹底）
②ベル着（チャイムが鳴ったらすぐに着席）
③家庭学習（学年×１０分＋１０分の実施）→学習チャレンジ１４の取組
④朝読書（１０分読書の実施で読書習慣の醸成）
⑤あいさつ（心のつながり、地域とのつながりづくり）
⑥掃除（汗して働く児童生徒の育成）
⑦本時のめあての表示（学習のねらいに迫る学習課題の設定）
⑧学習振り返りの場の設定（次の時間につながる授業評価等の工夫）
⑨ノート指導（授業の足跡が残るノート）
⑩校区教員の交流（情報交換、出前授業の実施）

ウ）「フラッグシップ（先行）教科」の設定

そして、「Ｃ授業づくり(授業改善)」については、評価問題の作成を通して、授業改善の方法を研究してきた国語科部会、全国学力・学習状況調査結果から授業見直しと改善について検討してきた数学科部会、理科部会の３教科部会を「フラッグシップ（先行）教科」として位置づけ、授業改善についての発想や工夫を他教科に発信し、その後全教科で取り組むという、2段階のしくみを築いて、全校で学力向上を目指してきた。

（３）研究体制

＜研究体制（イメージ）＞



（４）１年間の主な取組の経過　※「Ｃ授業づくり(授業改善)」を中心に

月	取組内容	研究授業
4	全国学力・学習状況調査の自校採点 授業改善の取組	
5	全教職員が全国学力・学習状況調査を回答し、ねらいを確認・授業改善の取組	
6	定期テスト問題の工夫　授業改善の取組・国語部会（研究授業に向けた検討）	数学科研究授業
7	授業改善の取組	国語科研究授業 音楽科研究授業
8	校内研究全体研修会・研究授業の実施に向けた検討	
9	授業改善の取組	数学科・音楽科・社会科・理科科研究授業
１０	定期テスト問題の工夫　　授業改善の取組	国語科・数学科・保健体育科研究授業 総合的な学習の時間（人権）研究授業
１１	定期テスト問題の工夫　　授業改善の取組	
１２	授業改善の取組 学び確認テストの実施、採点分析	
1	授業改善の取組	
2	評価問題の実施、採点と分析	

（５）具体的な研究内容・方法，研究を進める上での工夫点等

校内研究全体としては、３年間におよぶ研究のため、取組は多岐にわたるが、紙面の制約上、今回は「Ｃ授業づくり(授業改善)」の国語科部会の取組に焦点を当てて報告させていただく。

ア）定期テストの活用問題や記述問題の工夫

①テスト問題の工夫を、学年を超えて紹介し合い、新しい、よりよい問題を作成する取組を一昨年度から始めた。

②３年生１学期中間テストでは、小説の内容をふまえ、登場人物になってもう一人の登場人物に話すという、書くことの問題を出題した。

③１学期の期末テストは文章から読み取ったことを自分の体験を根拠として書く問題と、さらに教科書の文章以外のグラフからも情報を得て、宣伝文を書く問題を出題した。二つのテストを比べると、問題の難易度としては、期末テストの方が難しいであろうと教師は予想していたが、正答率は期末テストの方が高い結果であった。

④２学期の期末テストでは、小説「故郷」を学習した後のテストに、生徒たちにとって故郷となる栗東市が、将来どんな町になってほしいかを、今の自分の生活を踏まえて書く問題を出題した。

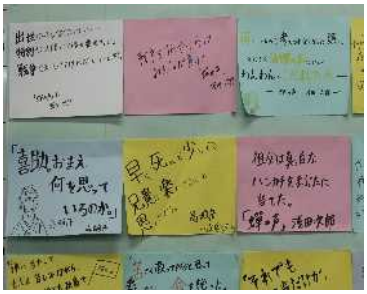
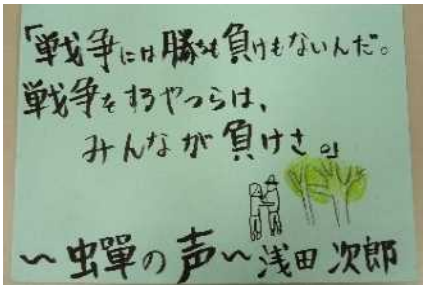
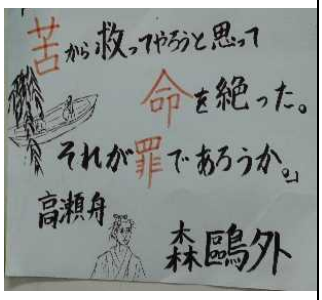
イ）自分の考えを書いて伝え合う活動

①アプローチ事業調査部会の取組（授業案）を参考とした研究授業（１年生）

教科書の「竹取物語」を読んで、翁の立場でかぐや姫と結婚させたい貴公子を他の資料等を使ってグループで選び、クラスに発表する活動をした。教科書の文章以外の資料の長文から、必要な情報を探すことに生徒たちは苦労しながら取り組んだ。発表の場面では、質問をしたり自分のグループと同じ意見の発表にはうなずいたりしながら、楽しく活動した。（１年生）

②「根拠を明確にして、自分の考えが書ける力」をつけるための３年間の積み上げ

「根拠を明確にして、自分の考えが書ける力」をつけることを３年間を貫くねらいとして設定し、＜教科書の文章を読む＞→＜文章に関連する、身の回りや自分のことについて考えを書く＞→＜交流し合い、吟味する＞という流れを基本に授業を展開した。

１年時	「書くことのワークシートを使い、基本的な短文を書く。」を重点に進めた。
２年時	・少し長い文章を書くことの練習のために、『盆土産』を読み、繰り返し出てくる『えんびフライ』という表現について、それぞれ解釈を考えて書き、交流し評価し合った。 ・「意見文を書こう」では、学校行事の時期について、根拠を明確にして意見文を書くために、学校行事についての話し合いの文章やアンケート結果を提示した。意見文の構成を考える際に、根拠として挙げられることを付せんに書き、どの事実を根拠として使うかを考えさせた。また、書いた意見文を、読み合い評価し合った。→「電車等の優先座席は必要か」について自分の意見を述べるテストを実施した。 ・「走れメロス」を読んで、インタビューをする活動では、メロス・友人セリヌンティウス・王ディオニスになって原稿を考え発表し、評価し合った。 ・「批評文を書こう」観光ポスターを批評する文を書く。観光ポスターの要素を話し合った後、自分が選んだポスターについて批評する文を書き、書いた文章を交流し合った。
３年時	・「握手」を読んだ後、他の詩や小説等の中で、「握手」「手」が、何を表すものとして出てくるかを自分で探した作品を紹介し合い、批評した。 ・展示デザインについての文章を読んで、内容を捉えた後自分の教室の掲示物について批評した。 ・「読書と情報」では、小説を読んで、その作品になくてはならない一文を抜き出してポップに書き、なぜその文を選んだのかを説明する文を書いて紹介し合う活動を行った。    ・「故郷」では、本文を読み取り、登場人物３人による鼎談の台本を作って発表し合う活動を行った。

③「めあて」の表示、文章での「ふり返り」

１時間ごとに何をする時間か、何ができるようになる時間か、わかりやすいような表現で「めあて」を書くように申し合わせた。また、１、２年生では毎時間行っている漢字テストに「ふり返り」を書く欄を設定し、提出させて、教師がコメントや励ましを書くことができた。

④キーワードやキーセンテンスに線を引く活動を取り入れる

昨年度、実施したテストの中で、複数の条件をふまえて、文章で答える問題について、指示の読み落としがあるのではないかということが見えてきた。例えば、「常体（～だ。～である。）で書け」という指示に、答えの内容は正しいのに「敬体（～です。～ます。）」で答えてしまったり、ポスターに書かれている文の表現について書けという問題に、絵について書いてしまったり、などであった。そこで、キーワードやキーセンテンスに線を引く活動を取り入れた。

【研究成果と課題】

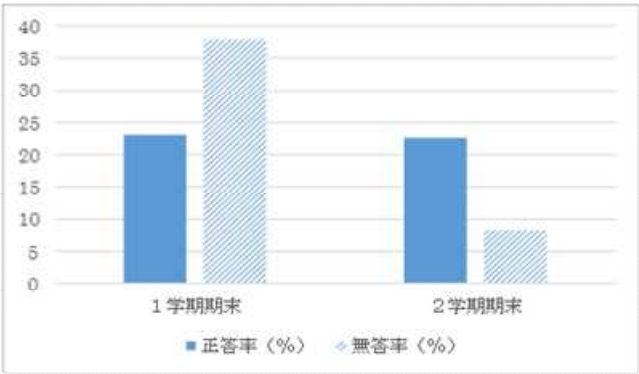
（１）研究成果

ア）国語科における成果

「根拠を明確にして自分の考えを書く」「複数の資料から適切な情報を得て、自分の考えを書く」力を向上させるために取り組んだ（１）定期テスト問題の工夫、（２）自分の考えを書いて伝え合う活動、（３）「めあて」の工夫・文章での振り返り、（４）キーワードやキーセンテンスに線を引く活動の結果、定期テストの書くことの問題について、1 学期末と 2 学期末を比較すると、次のような効果が見えた。

＜定期テストの「書くことの問題」の無答率の変化（第３学年５クラス）＞

	正答率（%）	無答率（%）
１学期期末	２３．０	３８．０
２学期期末	２２．５	８．３



正答率では、大きな改善は見られないが、無答率が大幅に低くなり、答えを書こうとする生徒が増えたことがわかる。

イ）全国学力・学習状況調査結果の改善

本年度の学力・学習状況調査の結果では、活用Ｂの作文の無解答率が昨年度に比べ、大幅に減り、正答率が向上した。そのことから、これまでの国語科の取組は、今後も効果が期待できそうである。

また、今回の調査結果全体を見ても、全国平均値との比較において“差が縮まった”という点からいえば、学力５項目（国Ａ・国Ｂ・数Ａ・数Ｂ・理）とも、前回調査より良好な結果となった。この結果の背景には、これまでの様々な本校の取組がようやく実を結んできた成果であると考えられるが、中でも、今回の調査対象学年(現３年生)が、学年が上がるにつれて授業態度がよくなったことに主な要因があると思われる。また、現３年に限らず、学校全体として、生徒の授業に対する姿勢は、この３年間で大きく改善されてきている。もちろんこの背景には、学力向上アプローチ事業の成果に併せ、栗東中学校区「確かな学力」向上推進会議の取組（１０の共通実践）の成果、また本校独自の生徒指導や人権教育、特別支援教育などの、個々の特性や事情に応じた多様な教育活動があったことも事実ある。しかし確かに言えることは、安心・安全で、意欲的に進められる授業の中で、生徒の学力は確実に高まるということだろう。

（２）課題等

教科書の文章から読み取った内容を根拠にして書く、文章から読み取った内容と関連のあることや、自分が考えたこと、調べた情報等をわかりやすく書く活動を今後も続けることで、「根拠を明確にして自分の考えを書く」「複数の資料から適切な情報を得て、自分の考えを書く」力を向上させたい。さらに、生徒が主体的に学ぶ授業づくりに取り組んでいきたい。